

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：16K16791
研究課題名（和文）アメリカ文学における「ウィルダネス・イデオロギー」の構築と脱構築

研究課題名（英文）Reconstructing Wilderness Ideology in American Literature

研究代表者
山本 洋平（Yamamoto, Yohei）
明治大学・理工学部・専任准教授

研究者番号：40646824
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカ文化史・環境思想史の重要な概念「ウィルダネス」がどのように文学テキストに表れているかを考察した。2000年以降のエコクリティシズム「第二波」以降、「国立公園」から「都市自然（urban nature）」に至るまでの人と自然の相互作用に着目するようになったが、この点をヘンリー・D・ソローからウィラ・キャザーまで時代縦断的に研究し、アメリカの自然観の変容を捉えることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年のエコクリティシズムの動向は、批評理論的には"trans-corporeality"や"multi-species"といった身体の越境性・浸食性・相互関連などが議論されるようになり、他方、気候変動が喫緊の社会的な課題になるに呼応してきた。本研究の蓄積は、これらの人文学の使命に応答しうるものである。

研究成果の概要（英文）：I have studied the notion of wilderness which began to receive more attention after Roderick Nash's *Wilderness and the American Mind* in 1967, which called attention to a dual aspect of wilderness: "the mental criteria for wilderness are as important as the physical." Influenced by Nash's genealogical studies, several critics have discussed wilderness as a socially and historically constructed concept. As the result, not unlike the untamed wilderness American authors such as Thoreau, Melville, Dickinson, Jewett, and Cather so passionately narrates, the thickets and branches of his/her writings, too, must be ventured into and woven through by the reader. In this regard, one of my achievements in this study is to go beyond the oversimplified dichotomies of previous criticism, focusing on the details of their works in relation to the concerns of literary criticism and the environmental humanities.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ環境文学 ウィルダネス ソロー キャザー

1. 研究開始当初の背景

本研究はアメリカ文化史における重要な概念「ウィルダネス」を、19世紀から20世紀にかけての環境文学のテキストの検証を通じて検証し、再定義する目的とともに開始された。ウィルダネス研究の動向は、2000年以降のエコクリティシズム「第二波」において、原生自然に絶大な価値をおく自然観に疑問が呈されて以降、議論が交わされてきたが、現在においてもその重要性はますます高まっている。手つかずの自然としてのウィルダネスは、北米においては制度として区画されてきた「国立公園」としての空間にかぎらず、いわゆる「都市自然(urban nature)」なども含めて、人と自然の相互作用を考慮に入れた議論となってきた。たとえばそれは日本における「里山」概念に典型的に見られるように、二次的な自然が認められる中で、ウィルダネスをどのように位置づけるかという議論に変遷してきている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀アメリカ文学における「ウィルダネス(wilderness)」表象を分析し、系譜的に論述することである。手つかずの荒野に特権的な地位を与える自然観、すなわち「ウィルダネス・イデオロギー」の諸相を考察するために、ヘンリー・ソロー(Henry Thoreau)研究を継続しつつ、新たに初期ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の小説、南北戦争以降のウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)の詩を研究対象に加え、「ウィルダネス」をキーワードとした作家横断的・時代縦断的研究を行う。アメリカ・ルネサンスにおけるウィルダネス表象を複層的かつ系譜的に再定義する基盤を整えることが最終目標であった。

3. 研究の方法

本研究は以下3点の方法を用いた。

1. 環境学のの古典とされる研究書を体系的にまとめ、最新の研究書を加えた見取り図を作成する。本研究が依拠する体系的な研究書としては第一に *Wilderness and American Mind*(1967)が挙げられる。著者 R・ナッシュ (Roderick Nash) は、19世紀作家のウィルダネス礼賛を「ロマン主義的なナショナリズムの常套句(Romantic nationalistic cliches)」(Nash84)と捉えた。ナッシュの研究を継承する研究書 Max Oelschlaeger の *The Idea of Wilderness From Prehistory to the Age of Ecology*(1993)は、狩猟から農耕への文明の変遷、科学革命、モダニズムといった歴史的動向が、ウィルダネスと人間社会との関係を変え、その概念にも影響を及ぼしてきたと指摘している。その後も Callicott, J B, Michael P. Nelson 編 *The Great New Wilderness Debate: An Expansive Collection of Writings Defining Wilderness, from John Muir to Gary Snyder*(1998)、この続編 *The Wilderness Debate Rages on: Continuing the Great New Wilderness Debate*(2008)が出版され、現在にいたってもなお、アメリカ文化におけるウィルダネスに関する研究が続けられている。
2. 以上の文化研究を文学研究に応用するため、L・ビュエル (Lawrence Buell) は *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*(1995)を相対化する(ビュエル中心主義批判をする)ために、これを凌ぐ研究書を位置づける。挙げられる。ビュエルはソローはウィルダネスをより流動的な概念として捉えていたと指摘する。その方途として、T・リンチ(Thomas Lynch)が“‘The Domestic Air’ of Wilderness: Henry Thoreau and Joe Polis in *The Maine Woods*”(1997)で述べた「ウィルダネス・イデオロギー(wilderness ideology)」という用語を利用する。この語を、自然と文明という二分法を批判的に検証するうえで有用な概念として前景化することを試みてきたが、その過程で、ウィルダネス神話 (Wilderness Myth) という語がより良く本研究を説明すると発見した。これ以降の研究では、後者の語を用いることになる。
3. アメリカ文学のテキストとして、ヘンリー・ソローに加えて、ハーマン・メルヴィルとウォルト・ホイットマンを研究対象に加え、ネイチャー・ライティングの基本的要件である一人称ノンフィクションという枠組みを越えて、ジャンル越境的、作家横断的にアメリカン・ルネサンス研究を遂行する。ここに、女性作家(ストウ夫人、エミリー・ディキンソン、セアラ・オーン・ジュエット、ウィラ・キャザー、シルコウ)の研究を加えることで、ウィルダネス神話批判を行う。

4. 研究成果

大きな研究成果は2つある。

1. 本研究の総論である「19世紀半ばの超越主義から20世紀前半のモダニズムの作家たちを時代横断的に研究することで、ウィルダネス表象を立体的に論述する」ことにおおよそ道筋をつくることができた。この総論は以下に述べる各論の整備とともに精緻化を進め、2022年までに書籍にまとめる予定である。各論については、中軸に据えていたヘンリー・D・ソロー (Henry David Thoreau) とウィルダネスとの関連を批判的に捉える論文を完成させており、現在投稿準備中である。他方、メルヴィルとホイットマン研究は想定していたより成果を出すことができていない。両作家の主要作品を読み進めることはできたが、先行研究の全貌を捉えることに苦戦している。日本と北米の学会に参加することを通じて、この壁を乗り越えたいと考えている。
2. 各論の内容として、女性作家の重要性が高まり、男性中心主義的な文化史観を相対化することに成功した。本研究の最後の2年間は、マーガレット・フラーやストウ夫人、エミリー・ディキンソン、セアラ・オーン・ジュエットやウィラ・キャザーらの女性作家研究に大きく研究の軸足を移すことになった。「ドメスティシティ」概念を彫琢し、〈ウィルダネスとドメスティシティ〉という視点を導入することで、文明と自然という固定的二項対立をずらすことが可能となり、翻って19世紀アメリカ文学のウィルダネス・イデオロギーを逆照射することになった。以上の論文も、最終的に書籍にまとめることを想定しながら、英語と日本語とで順次発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本洋平	4. 巻 43
2. 論文標題 ソローの嗅覚―― "Slavery in Massachusetts"とDissentの位相	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yohei Yamamoto
2. 発表標題 Willa Cather 's Frontier Rhetoric
3. 学会等名 63rd annual Willa Cather Spring Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本洋平
2. 発表標題 "Climb right over the fence" --ウィラ・キャザーObscure Destiniesにおける家計
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 Yohei YAMAMOTO
2. 発表標題 Walden, Slavery, Work Ethics in Antebellum America
3. 学会等名 Thoreau From Across the Pond: International Symposium (国際学会)
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 Yohei YAMAMOTO
2. 発表標題 My Antonia and the Alternative Frontier Rhetoric
3. 学会等名 The 63rd annual Willa Cather Spring Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 山本洋平
2. 発表標題 アメリカン・ルネサンスにおける市民的不服従をめぐって “Slavery in Massachusetts” を中心に
3. 学会等名 日本ソロー協会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山本洋平
2. 発表標題 The Muse Speaks in Prose: The Anxiety of Influence in Thoreau 's Earlier Works
3. 学会等名 The 13th Wenshan International Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 山口和彦、中谷崇	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 330
3. 書名 揺れ動く 保守	

1. 著者名 山本洋平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 15
3. 書名 『環境人文学 他者としての自然』野田研一, 山本洋平, 森田系太郎編著	

1. 著者名 山本洋平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 21
3. 書名 『鳥と人間をめぐる思考：環境文学と人類学の対話』野田研一・奥野克巳編著	

1. 著者名 山本洋平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 10
3. 書名 『交感 自然・環境に呼応する心』野田研一編著	

1. 著者名 山本洋平（共著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 394
3. 書名 鳥と人間をめぐる思考－環境文学と人類学の対話	

1. 著者名 山本洋平（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 460
3. 書名 交感 自然・環境に呼応する心	

1. 著者名 山本洋平（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 352
3. 書名 環境人文学I 文化のなかの自然	

1. 著者名 山本洋平（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 352
3. 書名 環境人文学II 他者としての自然	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----